

書跡資料の調査

南都諸大寺を中心として継続しておこなっている書跡資料の調査は、今年度は薬師寺、法隆寺、興福寺などについて実施した。薬師寺は、東大史料編纂所との共同調査である。今年度は25～27函の調書作成と、20、22函の写真撮影をおこなった。木製の文書箱は全部で28箱あるが、その最終段階で大型の箱に多種多様のものが大量に収納されており、なかなか調書作成のスピードアップがはかれない状態である。しかし、調査終了分からでもデータ公開と中世史料分の取りまとめをしようと考えている。法隆寺は、文書記録の整理目録化の作業をおこなっており、また興福寺は「興福寺典籍文書目録第二巻」収録分以後の経箱の調査が課題である。

南都以外では、仁和寺の文書の釈文作成と御経蔵所蔵分の目録作成の作業をおこなっている。1960年代から調査してきた仁和寺調査の史料刊行の継続事業として、近いうちに何らかのかたちで活字化する計画である。以上のほか、各教育委員会の依頼により、奈良の西大寺元版一切経、京都の興聖寺一切経、滋賀の永源寺文書などの調査と、文化庁美術工芸課の醍醐寺文書、東大寺修二会

資料などの調査に協力した。

また、1992年に北浦直人氏から寄贈された北浦定政関係資料を、岩本次郎調査員を中心として継続して整理してきたが、96年度に、その目録と一部資料の翻刻、関連論稿2編を収録した『北浦定政関係資料』(97年3月)を刊行した。江戸時代末期の平城京、御陵、条里の研究者であった北浦定政は、数多くの調査図面、調査日誌、古文書の写本などを残しているが、その内容紹介をも含んだ目録と、寄贈資料に含まれている書状や和歌などの目録をあわせ収録した。定政の「平城宮大内裏跡坪割之図」は、南都に残っている条里、条坊関係の古文書を獵渉した成果と、かれの实地踏査成果とが、あいまって図面上に結実したもので、文献と自然科学を取り込んだ学際的研究といえるものであり、条坊復原の基本をなしていると高く評価できよう。今後、この北浦定政が遺した学術的成果は、測量技術との関係などの再確認の作業を通すことによって、より評価されるのではないと思われる。今後は、これら定政関係資料を関連分野で協力して、活用する研究が課題となろう。

(綾村 宏)